

民数記11章4-6、10-16、24-29節

ヤコブの手紙4章7-12節

マルコによる福音書9章38-43、45、47-48節

先週ぐらいからすっかりと秋らしくなりました。朝夕、教会の庭を歩きますと、半袖では少し肌寒いくらいです。

本日は旧約日課を中心に学びます。エジプトから脱出したイスラエルの民が、旅路の過酷さから、エジプトにいた方が良かったと嘆く個所です。出エジプト記の16章に類似するお話がありますが、この民数記の場合は、他の要素が加わっています。一つは、「再び泣いて言った」(民11:4)とある通り、この嘆きが二回目であることです。もう一つは、「私一人ではこの民すべてを負うことはできません。私には重すぎます」(民11:14)とある通り、指導者であるモーセ自身が嘆いている点です。

最初の点ですが、食べ物を欲しがったイスラエルの民は、天からマナをいただきました。しかし、そのマナでは満足できなくなったのです。人々は、「誰が私たちに肉を食べさせてくれるのだろうか。エジプトにいた頃、ただで食べていた魚が忘れられない。きゅうりもすいかも、葱も玉葱もにんにくも。今では、私たちの魂は干上がり、私たちの目に入るのは、このマナのほかは何もない」(民11:4-6)と嘆くのですが、これらの言葉から二つのことが示されます。一つは、エジプトという地域の豊かさです。エジプトは、砂漠というイメージがありますが、ナイル川の水の豊かさから、中東地域の穀倉地帯でもあります。地中海の恵みも含めて、食糧事情は、豊かなのです。その意味では、イスラエルが奴隷状態であったとはいえ、食べることに限っては、事欠くことはなかったのでしょう。しかし、同時に、人間は食べることでさえできればよいというわけではない。そのような理念が、出エジプトへの原動力になります。もう一つは、そのような理念と相対する事柄といえますが、人間の本質の一つの現れです。飢えという現実的困難さに直面した時、人間は理念だけでは判断しない、行動しない可能性があるということです。

次のモーセの嘆きについてですが、それは「あなたは、なぜ、僕を苦しめられるのですか。なぜ私はあなたの恵みを得ることなく、この民すべてを重荷として負わされるのですか」(民5:11)から始まります。次に「この民すべてに与える肉を、私はどこから得るのでしょうか」(民5:13)と極めて具体的な業務の困難さに触れ、「私一人ではこの民すべてを負うことはできません。私には重すぎます」(民11:14)と自己の限界に対する認識を明らかにし、最後に「私にこのような仕打ちを続けるのなら、むしろ私を殺してください」(民11:15)と、極めて危険な状態にまで達します。

この民の嘆きとモーセの嘆きに主なる神様はすぐに応えてくださいます。しかし、最初に解決されるのはモーセの嘆きについてでした。「主はモーセに言われた。『イスラエルの長老たちのうちから、民の長老およびその役人としてあなたが知っている者を七十人、私のもとに集めなさい。彼らを会見の幕屋に連れて来て、あなたの傍らに立たせなさい』」(民11:16)。主なる神様は、最初に指導者であるモーセの助け手を構成し、民の嘆きに対応しようとしたのでした。それゆえ、七〇人の長老と、エルダドとメダドという二人が一時的ですが預言状態に入ります。

この出来事について、モーセの後継者であるヨシュアから批判が入るのですが、モーセは「**あなたは私のために妬みを起こしているのか。私はむしろ、主の民すべてが預言者になり、主がご自身の霊を彼らの上に与えてくださればよいと望んでいるのだ**」と語ります。ヨシュアの批判が、モーセの言通り単なる妬みであったとは思えませんが、モーセの言葉は、何のために預言者がいるのか、また何のためにイスラエルがいるのか、そのことを明確に示していると思います。それは主なる神様の業を示すためです。

さて、この旧約日課と、福音書の共通点ですが、一つは、主なる神様の業、言い換えれば主なる神様の御心を行うことは、指導的な立場の人が、一人ですべてを担うものではない、言い換えれば背負い込まなくてもよいということです。民数記においてモーセは、助ける人々を与えられました。福音書において、イエス様は、一人ですべてをなさろうとはされませんでした。活動の最初から弟子たちを必要とされました。モーセ以上に力を持つイエス様が、すべてを行った方がよいと思えるのですが、より多くの人に主なる神様の意思、その愛を示すには、たくさんの人の協力が大切とされたのです。しかし、人々が協力して何かを行うということは、いつでも正しく理解され、うまくことが運ぶわけではありません。ヨシュアはモーセの新たなる預言者の選びを批判しましたし、イエス様の弟子たちに至っては、「**先生、あなたのお名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、私たちに従わないので、やめさせました**」(マルコ 9:38)と語る通り、自分たちに従わなかったという基準で、イエス様と同じように悪霊追放を行う人を批判しました。人間的思いがそのような協力を妨げてしまう場合があるのです。そして、そのような人間的思いが入り込んだ行為であるからこそ、自分たちが望まない十字架に直面した時、弟子たちは逃げ出したのでした。平たく言えば、望まない行為は行わなかったのです。結果としてイエス様がおひとりで十字架の重荷を担われたのですが、それはそれでよかったのです。死に至るような苦しみ・重荷は、もうイエス様だけでよいということが示されたからです。そして、イエス様は、弟子たちの協力を必要とはするのですが、「**よく言うておく。あなたがたがキリストに属する者だという理由で、一杯の水を飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける**」(マルコ 9:41)とある通り、その人ができることを行えばよいとくださっているからです。

わたしたち教会も、イスラエルでありまたイエス様の弟子たちでもあります。それらが存在する理由は、第一に主なる神様を信じる人々とは、どのような人々であるかを示すためです。そして、主なる神様の愛を示すためです。残念ながら、その目的すら全く達成できていないのが現実です。イスラエルという集団は、二千年を超える年を重ねて、その信仰の継続的強さは示していますが、主なる神様の愛を示しているとは言えません。教会は、その歩みが二千年に近づいていますが、いまだ分裂と混乱の中にあります。しかし、主なる神様はそれでもイスラエルと私たち教会を必要とされています。ことにわたしたち教会は、わたしの失敗を全て理解してくださり、それでも愛を示して招いて下さるイエス様を信じています。わたしたちは、イエス様によって、重荷を軽くしていただいで歩んでいるのです。だからこそ、より広く主なる神様の愛し示すことができるはずなのです。そのことを改めて自覚しながら、これからも歩んでいきたいと思えます。